令和５年度研究推進計画

学 校 名　下黒瀬小学校
学校長名　　若狭　弘子

１　研究主題，研究内容・方法について

①　研究主題

「わかった」「できた」を実感し，学び続ける児童の育成

～算数科における育成したい資質・能力を明確にした授業づくりを通して～

②　主題設定の理由

本校では，６年前より児童に育成すべき資質・能力の一つ「課題発見・解決力」を国語科「読むこと」領域において高める研究を推進してきた。

昨年度は，各学年の国語科における課題のある領域で，付けるべき力を明確にした「問い」を追究する授業づくりを行うと，主体的に学び続ける児童の育成を図ることができると考え，研究を進めることとした。

その研究から，大きく２点の成果が挙げられた。１点目は，児童の困り感や疑問から「単元を貫く問い」や「個別の問い」を設定し，児童が何を学ぶか理解できる形で付ける力を提示することで、付ける力を児童と教師で共有できたことである。付ける力は，児童の実態から，課題となる力はどの部分で，これまでにどのような力を付けてきているのかということを踏まえて，学習指導要領解説の内容を具体化し，さらに，児童が理解できる文言で示した。このことで，教師側は，指導内容を明確にして焦点を絞って授業づくりを行うことができ，児童側は，目指すゴールが明確となり，そのゴールが自分にとって必然性のあるものとなるため，自分事として捉えることができた。また，児童自身が問いを意識し，自分を振り返って次の課題へつなげることもできた。教師側も，児童が問いに対して考えた姿や，振り返りを分析することで，問いや単元構成の妥当性を考え，授業改善を図ることができた。さらに，国語科の単元末テストの結果についても，12 月時点で，低学年の平均点が９４．７１点，高学年の平均点が８８．６５点であり，目標の指標である８５点を上回った。児童に付けたい力が身に付き，一定の成果を挙げられたと言える。２点目は，児童が自ら表現をしようとする場を設定するための工夫である。個人思考の前にペアトークやグループトークを行う「相談タイム」の設定や，表現する手助けとして ICT を活用することを行った。児童アンケートの設問「自分の考えを積極的に伝えようとしている」に対して，肯定的評価を６月と１２月で比較すると，１１ポイント増加していた。

一方で，大きく２点の課題も見られる。１点目は，国語科で付けた力の活用に関する課題である。カリキュラム・マネジメントの視点から，国語科で付けた力が他の教科・領域で活用できる場の設定を考えることが大切である。１２月に行った，標準学力調査の国語科と算数科の記述による解答の正答率を比較すると，国語科の目標値６３．１に対して，正答率が６９であった。算数科の目標値３４．１に対して，正答率が３２．９であった。国語科において，記述で自分の意見を述べることについては，一定の成果が見られているものの，算数科になると目標値を達成することができていない。これまで本校で国語科を研究してきた力を基に，他教科の力を伸ばすことが必

要であると考える。２点目は，自分の考えを表現することに躊躇する児童への手立てについてである。児童アンケートの記述には，「自分の答えに自信がない」「新しい考えを出すことができない」という意見が挙げられている。児童が自分の考えをもつための手立てや、自分の意見に自信がもてるようにするための手立てが必要である。

この２つの課題を解決していくために，教職員でまず、本校児童のよさや課題、目指す児童の姿を共有した。児童の課題としては、算数科における基礎学力の定着及び付けた知識が思考に結びついていないこと，苦手なことから逃げてしまう，失敗するとそれ以降挑戦できなくなってしまうことが挙げられた。また，教職員の授業実践における課題としては，実生活とつなげた単元づくり，個人差に対応した手立て，グループ活動や全体での表現のさせ方，学力の確実な定着が挙げられた。そこで，本校の児童に育成したい資質・能力の見直しを行い，以下の表にまとめた。

【本校で育成したい資質・能力】　　令和５年度

	身近な生活場面から，「なぜだろう？」「どうしてだろう？」と考えようとする。	**好奇心・探究心**	身近な生活場面から，やってみたい！試してみたい！チャレンジしたい！と考えようとする。	
誰に対しても分け隔てない態度で接し，相手の良さを見つけ，相手を受け入れることができる。また，自分とは違う意見にいいね！と言うことができる。	見つけた疑問や不思議をどのようにすれば解決できるか仲間と協働して見通しをもとうとする。	見つけた疑問や不思議の解決方法を考える時に，物事をいろいろな角度から多面的に見ようとする。（複数の解決方法を考えている。）	考えたことを，やってみようと試行錯誤して取り組もうとする。	失敗を恐れず，目標に向かって行動することができる。
相手の話の内容を正しく理解しながら聴くことができる。また，適切に問いかけや質問をすることができる。	自分の長所や短所を知り，人と比べることなくありのままの自分を受け入れることで，自信をもつことができる。	失敗やうまくいかないことに対して，改善策を考えて次に生かすことができる。（一人でも友達とでも）	解決するために，今までの経験や既習事項が使えないかと考えようとしたり，材料となるものを比べて考えたりすることができる。	自分が目指すべきゴールを明確に見据え，そのゴールに向かって粘り強く取り組むことができる。
人間関係形成力	自分の思いを素直に伝えることができる。また正しく伝えるために筋道を立てて話をすることができる。	まわりの友達と仲良くなりたいと思い，仲良くなるための適切な行動をとることができる。	失敗したり，上手くいかなかった時には，気持ちを切り替えて，取組を続けることができる。	**実行力**

これらの力を授業づくりでも意識して取り組んでいくことが，課題解決に必要ではないかと考える。

こうしたことから，算数科において習得すべき力と育成したい資質・能力を明確にした授業づくりを行えば，「わかった」「できた」を実感して，学び続ける児童を育成することができると考え，本研究主題を設定した。

③　研究仮説

算数科において習得すべき力と育成したい資質・能力を明確にして授業づくりを行えば、児童が「わかった」「できた」を実感して学び続けることができるであろう。

④　研究内容と方法

ア　研究内容

・算数科において，付ける力を明確にした授業づくり
・児童が学びを実感するための手立て
・児童が考えをもち、対話などで表現するための手立て

イ　研究方法

・講師や文献による理論研修
・基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させる取組についての研修
・全国学力テストの分析
・研究授業による実践
・標準学力調査の分析
・児童・教職員による振り返りやアンケート調査の実施と分析

⑤　研究体制

・教員は年間に学年で一回授業提案を行うことを通して，「わかった」「できた」を実感できるよう授業改善を図る。
・研究授業の前には，模擬授業の形式で指導案検討を行うことで，教職員が協働して授業づくりを行う。
・授業観察は，焦点化児童を決めてその児童の姿を観察し，その後の協議会ではその児童の姿から検証を行う。

２　検証計画

①　検証の方法

児童，教職員によるアンケート，単元末テストの結果

②　検証の視点，方法及び指標

検証の視点	方法	指標
児童は，「わかった」「できた」という思いをもつことができているか。	児童による授業振り返りシート	肯定的回答が８５％以上
学び続けようとする児童は育成されたか。	教職員による授業振り返りシート	肯定的回答が８５％以上
	児童による意識調査アンケート	肯定的回答が８５％以上
育成したい資質・能力を明確にして手立てを考え授業実践をすることで，児童に付けたい力がついたか。	単元末テスト	全学年　平均正答率 ８５％以上

３　校内研修計画

４月，５月	理論研修 基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させる学びの土台づくりの研修 教材研究についての研修
６月，７月	研究授業 全国学力テスト分析
８月	学びの土台づくりの取り組みについての中間振り返り
９～１２月	研究授業
１２月	振り返り，授業改善，研究紀要作成
１～３月	まとめ（本年度研究のまとめ，次年度への方向性）

令和５年度　下黒瀬小学校研究構想図

学校教育目標

かしこく　やさしく　たくましく～社会に出て通じる力の育成～

めざす子ども像

進んで学び合う・自分も人も大切にする・何事も最後まで粘り強くやり抜く子

研究主題

「わかった」「できた」を実感し，学び続ける児童の育成

～算数科における育成したい資質・能力を明確にした授業づくりを通して～

算数科の学習

もっと学びたい！

算数科における付ける力の確実な習得

「わかった！」「できた！」

好奇心・探究心

？を大切にし，解決したいことを見つける心

答えに向かって見通しをもち行動しようとする心

人間関係形成力

相手の意見を聴き，自分の考えを伝える力

自分の役割を果たして，仲間と協力する力

実行力

自ら目標を設定し

失敗を恐れず行動に移し

粘り強く取り組む力

基礎学力の定着

- 下小タイム
- コグトレ
- 読書活動の推進
- 前年度までの研究を生かした国語科の授業

分かる授業

- 児童実態の把握
- 深い教材研究
- 教職員相互の対話

安心して学べる学習環境

安心して学ぶための学級（学年）経営，学習規律